

# いわゆる窮乏化の法則について

宇野 弘 藏

## 1

いわゆる窮乏化の法則は、ドップも指摘しているように、例の修正派の主張によって問題にされ、カウツキー等の正統派の駁論によって一應は片付いたことになっているのであるが、しかし事實は決してそうでなかった。修正派の主張は不幸にして、マルクスの唯物史観や経済學説に對する不十分なる理解をもってなされたのであって、カウツキーの駁論もその點に重點がおかれたのであった。いわゆる窮乏化の法則に對する解明も、したがって『資本論』の問題の箇所に對する解説的辯護に終始したのである。ところが修正派の提出した問題は、實は、

19世紀末以來の帝國主義段階の資本主義の諸問題に基くものであったのであって、それは『資本論』の單なる解説的主張をもって解明されるものではなかった。そういう解説的解明では、帝國主義も資本主義であるということに歸着するだけであって、その特殊な、いかえれば資本主義のいわば末期的諸現象を明らかにするものではなかった。修正派自身にしても、マルクスの學説に對する十分なる理解をもってその主張をなしていたとすれば、それは當然に帝國主義論の展開を與えるものに發展しなければならなかったものともいえる。實際また正統派も、修正派の主張の誤りを明らかにすることによって、一應は問題を片付けたにしても、なお残る問題の解明を避けるわけにはゆかなかつたのであって、後にヒルファディングの『金融資本論』やルクセンブルグの『資本蓄積論』等によって帝國主義論を展開せざるをえなかったのである。しかしここでもまた前者はその展開を直接的に『資本論』に接續して行い、そのために論旨は屢々混亂を免れなかったし、後者はこれに反して『資本論』のいわゆる再生産表式に基いて『資本論』そのものの修正を要求することになり、いずれもなお問題を明確に解決するものではなかった。さらに後にレニンが『帝國主義論』によってヒルファディングの主張を整理し、擴充したのであるが、そこでもなお『資本論』との關係は明確にはされなかった<sup>1)</sup>。もともと『資本論』自身が帝國主

1) レニン自身はその帝國主義論を『資本論』の規

義時代に先きだつて書かれたものであって、明確にこの新なる資本主義の發展段階を規定しえなかつたのは當然といへば當然である。しかしこのいわば資本主義の末期的段階を明確にしえなかつたことは、特に窮乏化の法則に關する『資本論』の規定に明らかにあらわれているように、『資本論』の原理論としての規定を段階論としての規定から、したがってまた現状分析から區別することを極めて困難ならしめるものがあつた——と、私は考えるのである。いかえれば問題はむしろ『資本論』の規定自身にある。ドップの論述もその點では依然として解説的主張に墮し、問題點を明解にしてはいないのである。

## 2

まず『資本論』における問題の箇所を引用しておこう。「社會的富、機能する資本、その増加の範圍及び精力、したがってまたプロレタリアートの絶對的大きさ及びその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業豫備軍も大きくなる。利用されうる労働力は、資本の膨脹力が發展させられるのと同じ原因によって、發展させられる。したがって、産業豫備軍の絶對的大きさは、富の諸力と共に増大する。しかしまた、この豫備軍が現役労働者軍に比して大きくなればなるほど、その窮乏がその労働苦に逆比例する固定的過剰人口がますます大量となる。最後に、労働者階級の極貧層と産業豫備軍とが大きくなればなるほど、公認の被救恤貧民もますます増大する。これが資本主義的蓄積の絶對的一般的法則である。それは、すべての他の法則と同じく、その實現に際しては種々の事情によって變化を加えられるのであるが、これらの事情の分析はここでなさるべきではない」(『資本論』第1卷インスティテュート版679頁。邦譯岩波文庫版第4分冊147—8頁)。

また同じ章のすぐあとでは、これも屢々この問題につ

定の直接的展開によってなしたものと考へているようであるが、事實は決してそうでない。その點にヒルファディングのような混亂を免れることができた理由があるのではないかと私は考へている。(雑誌『思想』1955年11月號所載、拙稿「帝國主義論の方法について」を参照せられたい。

いて引用される場所であるが、相対的剰餘價値の生産を通して發展する資本家的生産方法の確立が、労働の單純化によって労働力の商品化の實質的條件を整備し、資本の専制を基礎づける事實をあげた後、これに對應して形成せられる産業豫備軍による労働力商品化の社會的條件について次のようにいっている。

「……剰餘價値の生産のためのすべての方法は同時に蓄積の方法であり、また蓄積の擴大はすべて逆にかの方法の發展のための手段となる。それゆえ、資本が蓄積されるに従って、労働者の状態は、彼の受ける支拂がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、悪化せざるを得ないということになる。結局、相対的過剰人口または産業豫備軍をして常に蓄積の範圍及び精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも更に固く労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に對應する貧困の蓄積を條件づける。したがって、一極における富の蓄積は、同時に對極における、すなわちそれ自身の生産物を資本として生産する階級の側における貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積である」(同上(イ) 680—1頁, (岩) 149頁)。

問題点を示す、こういうマルクスの言葉は、『資本論』第1巻第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」の第4節に述べられているのであるが、それは「相対的過剰人口の種々の存在形態」に續いて述べられているのである。そしてその點が注目されなければならないことと私は考へている。この章の第1節は「資本構成の不変な場合における蓄積に伴う労働力需要の増加」として、資本の蓄積の増進と共に労働力需要が増加し、賃銀の騰貴を通して結局は資本の蓄積が制限せられることを明らかにし、第2節では、これに對して「蓄積とそれに伴う集積との進行中における可變資本部分の相対的減少」として、資本構成の高度化によって、第1節にあげられた蓄積の制限が資本自身によって或る程度解除されることを指示しつつ、かかるより高度の構成の資本の蓄積を促進する、集積の増進と集中との作用を明らかにするのである。かくして第3節は、第1節及び第2節に展開された資本の蓄積の二側面が如何に關連して現實化するかを明らかにしなければならないことになるのであるが、マルクスの場合その點が必ずしも明確に行われているとはいえないのである。

第3節は、「相対的過剰人口または産業豫備軍の累進的生產」と題され、第2節の末尾の「かくて、一方では、蓄積の進行中に形成される追加資本は、その大きさに比してますます少ない労働者を牽引する。他方では、週期

的に新たな構成において再生産される元の資本は、從來使用していた労働者をますます多く反撥する」(同上(イ) 662頁, (岩) 121頁) という言葉を受けて、「元來は資本の量的擴大としてのみ現われた資本の蓄積が、我々の見たように、資本の構成の不斷の質的變化において、その可變的構成部分の犠牲におけるその不變的構成部分の絶えざる増加において、行われる」(同上) という規定をもって始められている。ここでは最早や資本の構成に變化なく行われる資本の蓄積は、構成の變化を伴う蓄積のうち消されて、問題にされなくなっているのである。資本は、その蓄積を「不斷の質的變化」をもって行うのである。

もっともマルクスも實際上は資本の蓄積をそう一概に規定するわけにはゆかない。すなわち、こうもいっている——「社會的總資本を考察すれば、その蓄積の運動が或いは週期的變化を喚び起し、或いはこの運動の諸要素が種々の生産部面の上に同時に配分される。若干の部面では資本構成における變化が、資本の絶對的大きさの増加なくして、單なる集積の結果として起きる。他の諸部面では資本の絶對的増大が、その可變的構成部分の、或いはこれによって吸収される労働力の絶對的減少と結びつけられている。更に他の諸部面では、資本が或いはその與えられた技術的基礎上で増大をつづけて、その増大に比例して追加労働力を牽引し、或いは有機的變化が生じて資本の可變的構成部分が收縮する。すべての部面で可變資本部分と従って就業労働者数との増加は、常に激しい動搖と一時的な過剰人口生産とに結びつけられている」(同上(イ) 663—4頁, (岩) 123—4頁) と。しかしここでもまた有機的構成の變化に伴う相対的過剰人口の形成に重點がおかれているのである。そして結局は、「すでに機能しつつある社會的資本の大きさ及びその増加の程度と共に、生産規模及び動かされる労働者群の擴大と共に、彼らの労働の生産力の發展と共に、あらゆる富の源泉のヨリ廣くヨリいっぱいになった流れと共に、資本による労働のヨリ大きな牽引がそのヨリ大きな反撥と結びつけられている規模もまた擴大され、資本の有機的構成及び資本の技術的形態における變化の速さが増し、そして或いは同時に或いは交互にこの變化に襲われる生産部面の範圍が大きくなる。かくして、労働者人口は、それ自身によって生産される資本蓄積と共に、それ自身の相対的過剰化の手段をますます大量に生産する。これが資本主義的生産様式に特有な人口法則なのである……」(同上(イ) 664—6頁, (岩) 124頁) ということになる。もちろんこの資本主義社會に特有なる人口法則というマルクスの規定は、マルクス經濟學説の極めて重要な成果

の1つであるが、これは單に相對的過剰人口の形成という面だけに理解されてはならない。マルクス自身もいっているように、「資本による労働者のヨリ大きな牽引がそのヨリ大きな反撥と結びつけられている規模」の擴大されるものとして理解されなければならない。ところがこの節におけるマルクスの展開は、「ヨリ大きな反撥」に重點がおかれ、「ヨリ大きな牽引」は兎もするとその影が薄くなっている。前にも指摘したように、資本の蓄積が「資本の構成の不斷の質的變化」をもって行われるとせられる限り、それは當然といわなければならない。

たしかにマルクスも「過剰労働者人口なるものが蓄積の、また資本主義的基礎の上での富の發展の、必然的產物であるとするれば、この過剰人口はまた逆に、資本主義的蓄積の桿杆となる、いな實に資本主義的生産様式の一實存條件となる。それは、あたかも資本自身の費用で育成されたかのように全く絶對的に資本に屬するところの、自在に動かし得る産業豫備軍を形成する。それは、資本の變轉する價值増殖欲望のために、常に利用に應じ得る人間材料を、現實の人口増加の制限から獨立につくり出す。蓄積及びそれに伴う労働生産力の發展と共に、資本の突然の膨脹力が増大する……」(同上(イ)666頁、(岩)127—8頁)といっている。さらにまた進んで「近代産業の特徴的な生活過程、すなわち中位の活況、生産の繁忙、恐慌、沈滞の各時期がヨリ小さい諸變動に中斷されつつ10年毎の循環をなすという形態は、産業豫備軍または過剰人口の不斷の形成、或いは多く或いは少い吸収、及び再形成に基づいている、この産業循環の變轉する諸時期は、またそれとして過剰人口を補充し、そしてその最も強力な再生産動因となる」(同上(イ)666—7頁、(岩)128—9頁)ともいっている。しかしここでもまた産業豫備軍を基礎にして展開される好況期の蓄積が、如何なるものであるかは、明確にはされていない。「資本の突然の膨脹力が増大する」という點が繰り返して強調されるにすぎない。マルクスにとっては、19世紀中葉のイギリスの具體的事情が極めて強く印象されたものの如く、市場の急激なる擴張に對する生産の増大や鐵道事業のような特殊の部門の擴大が、この「膨脹力」の發現としてあげられるのである。

労働賃銀に關しても、その「一般的運動は、もっぱら、産業循環の時期轉變に對應する産業豫備軍の膨脹及び收縮によって規制せられる」(同上(イ)671頁、(岩)136頁)といい、「10年の循環期とその週期的諸段階とをもち、その上に蓄積の進展につれてこれらの段階がますます急速に繼起する不規則な諸變動によって交錯されるところの近代産業にとっては、ある時は資本が膨脹するゆ

えに労働市場が相對的に供給過少となって現われ、ある時は資本が收縮するゆえに再びそれが供給過多となって現われるというように、労働の需要供給を資本の膨脹收縮によって、したがって資本のその時々々の價值増殖欲望に従って規制する」(同上(イ)671—2頁(岩)136頁)という規定も、「逆に資本の運動を人口量の絶對的運動に依存させる……經濟學のドグマ」(同上)の批評としてあげられるにとどまるのである。かくて「産業豫備軍は沈滞及び中位の好況の時期には現役労働者軍を壓迫し、過剰生産及び發作の時期には現役軍の要求を抑制する。したがって相對的過剰人口は、労働の需要供給の法則が運動する際の背景である。それはこの法則の活動範圍を、資本の搾取慾と支配慾とに絶對的に適合する限度内に制限する」(同上(イ)673頁、(岩)139頁)ということになる。

「労働に對する需要は資本の増加と同じことではなく、労働の供給は労働者階級の増大と同じことではないのであって、2つの相互に獨立した力が相互に作用し合うわけではない。……資本は双方の側で同時に作用する。資本の蓄積が一方では労働に對する需要を増すとすれば、それは他方では労働者の『遊離化』によってその供給を増すのであり、また同時に失業者の壓力はヨリ多くの労働の流動化を強制し、したがって、ある程度まで労働の供給を労働者の供給から獨立させる。この基礎の上における労働の需要供給の法則の運動は資本の専制を完成する」(同上(イ)674頁、(岩)140—1頁)というのであるが、マルクスのかかる規定は資本主義社會の人口法則を資本にとって完全に無力化するものといわざるをえない。資本は人口による制限を有機的構成の高度化によって常に解除されていることになるのである。

かくしてこの節におけるマルクスの展開は、まさに「相對的過剰人口または産業豫備軍の累進的生産」という點に偏し、この相對的過剰人口を基礎にして行われる資本主義の發展を週期的循環としての好況期の擴張として規定することを、したがってまた恐慌論の理論的展開の手がかりを失うこととなっている。この節に續く第4節は、かくして著しく當時のイギリスにおける現状にひかれることになるのである。

## 3

さきに引用した問題の箇所は、第4節においては先ず「過剰人口が或いは恐慌期において急性的に、或いは不況期において慢性的に現われるというように、産業循環の段階轉換によってそれに押印される大きな週的に反復する諸形態を別とすれば」(同上(イ)675頁、(岩)

142頁) という前置きをして、例の産業豫備軍の「3つの形態」をあげたあとに續くのである。それは資本主義の發展に伴って「累進的に生産」される産業豫備軍としての「窮乏化」にはほかならない。もちろんこの産業豫備軍の「窮乏化」は現役軍の賃銀にも影響なしにすむわけではない。しかし先きにも引用したように「資本による労働者の……ヨリ大きな反撥」はその「ヨリ大きな牽引」と結びつけられているのであって、「産業豫備軍の累進的生産」は、それを基礎とする資本の累進的擴大と對應させられなければ、「資本主義的蓄積の……一般的法則」とはいえないのではあるまいか。マルクスのこの節における展開は、「産業豫備軍の累進的生産」を説いた第3節に引つづいて、「相對的過剰人口の種々の存在形態」からこの一面をとってこれを「絕對的一般的法則」としたという譏りを免れないのである。それは前にも指摘したように「不斷の質的變化」をもって行われるとする資本の蓄積によって、産業豫備軍を基礎にして好況期の利益を前に争って行われる擴大の一面を輕視することとなるからであった。根本的には各個別資本がその固定資本によって「不斷の質的變化」を阻害されている點が十分には考慮されないで、「元の資本もいつかは全身的更新の時期に達する」(同上(イ)662頁、(岩)121頁)ものとして、その「更新の時期」を週期的循環と關連づけなかつたことに、その原因があるともいえるであろう。いずれにしてもこの節の規定が産業豫備軍の形成の面にひかれて、その動員の面が輕視されていることは否定できない。

もちろん吾々も、マルクスがこの節につづく第5節の「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」によって教える事實を無視してよいというのではない。「労働者の最高給部分」にさえ恐慌が如何に酷烈なる影響を及ぼすかを見逃してよいというのではない。しかしここでの問題は、そういう現實の事情を伴いつつも資本がその規模を擴大してゆく、蓄積の一般的法則を明らかにすることにある。またそうでなければ剩餘價值論や利潤論乃至地代論に展開される一般的法則と對應したものにはならない。ドップは、このマルクスの「資本主義的蓄積の絕對的一般的法則」を「利潤率の傾向的低落の法則」と對比して、「反對する作用」を組合による労働條件の改善に認めるのであるが、法則そのものが再考を要するものであり、したがってまた「すべての他の法則と同じく、その實現に際し

ては種々の事情によって變えられる云々」のマルクスの附言も、その上で考慮されなければならない。實は「利潤率の傾向的低落の法則」でも、この蓄積の法則の十分なる展開が影響なしにはすまないことになっている。

「低落の法則」は、週期的循環を捨象していわば長期的傾向として貫徹されるのであって、「この法則の内的矛盾の展開」としては週期的恐慌の根據は解明されえないのである<sup>2)</sup>。それは兎も角としてこの「低落の法則」と對比せらるべき「資本主義的蓄積の一般的法則」は、「資本による労働者のヨリ大きな牽引」がそのヨリ大きな反撥と結びつけられている規模」としての資本の蓄積の法則でなければならない。それはまた「相對的過剰人口または産業豫備軍をして常に蓄積の範圍及び精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも更に固く労働者を資本に釘づけにする」というマルクスの言葉と矛盾するものではない。しかし「労働者階級の狀態は、彼の受ける支拂がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、悪化せざるをえない」というマルクスの言葉も蓄積の法則のこの一面的規定に結びつけられて説かれる限り、一面的強調の非難を免れないことになる。

『資本論』に展開される一般的法則が、當時のイギリスの現實の事情を例解とするということは、19世紀末以來の金融資本の時代の現實の事情を例解とするのとは異った關係にあるのであるが、しかしそれにしても一般的法則自身をこの現實の事情に解消することは正しくない。19世紀中葉のイギリスも、自由主義段階の特定の資本主義國としての現状を有しているのである。ドップのいうように「事實」を考慮するといっても、原理と段階論と現状分析との區別なしになされるならば、決してこの問題を解決しうることにはならないであろう。マルクス自身の原理的規定が必ずしも原理的規定として十分でないという場合には、なおさらその混亂は免れない。帝國主義段階を知る吾々としては、原理自身が如何なる根據によって原理たるかを明らかにしなければならないのであって、『資本論』の解説的解明にとどまるべきではないと私は考えるのである。

2) 拙著『恐慌論』附録2「『資本論』における恐慌の必然的根據の論證について」を参照せられたい。